2014/10/01
平成２６年１０月１日

会員各位

協会だよりー262(10月号)

JCRA(Japan Catalyst Recovering Association)
触媒資源化協会

トピックス：
- 第２２３回月例会（一泊研修会）
  開催日：平成２６年10月３日（金）～４日（土）一泊二日
  見学先：三菱マテリアル㈱直島製錬所（香川県直島町）
  集合地：JR 岡山駅西口（10：35までに集合）
  備　考：見学参加・・・４７名（懇親４５名、宿泊４４名、ゴルフ１４名）予定

秋川渓谷の紅葉（昨秋）©Takashi Matsuda

一．協会よりのお知らせ
【実施済事項】
【予定事項】
二．首都圏外郭放水路の見学報告
三．事務局より（十月度の予定）
四．【雑学】故郷紹介(筆者の故郷北海道余市町を語る)

１．協会よりのお知らせ

[実施済事項]

① 協会だよりー２６１（９月号）をメール&郵便で送信（９／１）

② 第２２２回月例会（見学会）
見学日：９月８日（月）12時30分～20時00分
見学先：首都圏外郭放水路（埼玉県春日部市上金崎720）
参加者：見学会　３３名、懇親会　３７名

③ 第三回運営委員会
日　時：平成２６年９月１８日（木）１６時～１７時
場　所：堺化学工業㈱東京支店会議室
議　題：第２２２回月例会纏め、第２２３回月例会・第２２４回月例会の準備等
出　席：岩崎委員長、木島委員、河原委員、菊地委員、重村委員、小林専務理事　計６名

2014/10/01

[予定事項]

① 第２２３回月例会（一泊研修会）
開催日：平成２６年10月３日（金）～４日（土）一泊二日
見学先：三菱マテリアル㈱直島製錬所（香川県直島町）
集合地：JR 岡山駅西口（10：35 までに集合）
宿　泊：ダイヤモンド瀬戸内マリンホテル（岡山県玉野市）
ゴルフ：瀬戸大橋カントリークラブ（岡山県玉野市）
備　考：見学参加・・・４７名（懇親４５名、宿泊４４名、ゴルフ１４名）予定

② 第２２４回月例会（講演会・新年会）幹事会
開催日：平成２６年１０月８日（水）１６:００～１７：００
場　所：協会事務局（ニュー新橋ビル６０１－A）
議　題：講師選定、会場準備、その他
出　席：幹事会社（中外鉱業㈱、東京化学開発㈱）担当運営委員（新興化学工業㈱、日揮触媒化成㈱）、専務理事。・・・予定

③ 平成２６年度 CMAJ・JCRA 幹部交流会
開催日：平成２６年１０月２３日（木）１７:３０～２０：００
場　所：JX グループ六本木クラブ
出　席：CMAJ（副会長、委員長、事務局長）７名、JCRA（会長、副会長、委員長、監事専務理事）６名・・・予定

2. 首都圏外郭放水路の見学報告

地下のパルテノン神殿（調圧水槽）で参加の皆様

台風・大雨による水害を軽減するために建設された首都圏外郭放水路について見学した。見学日の 9/8 は太平洋上の台風 14 号の影響で湿度の多い天気だったが、幸いにも見学中に雨の影

響は受けなかった。

東京国際フォーラム前に集合後バスで2時間程移動し、春日部市の江戸川沿いにある「龍Q館」に到着した。

「龍Q館」は首都圏外郭放水路の排水機場上に建つ、管理棟兼放水路紹介施設。

「龍Q館」のネーミングは、一般公募から、春日部市に伝わる「火伏の龍」伝説と「AQUA(水)」にちなんでつけられたものだそうだ。　龍Q館内では、映像と設備模型を用いて首都圏外郭放路全体についての説明を受けた。　中川・綾瀬川流域は地盤が低く水が溜まりやすい地形から、大雨のたびに洪水被害が繰り返されてきた。首都圏外郭放水路は洪水の被害を軽減するために中小河川の洪水を地下に取り込み、総延長 6.3km のトンネルを通して江戸川に流す世界最大級の地下放水路。

2006 年に完成(2004 年に部分通水)した後は大きな効果を発揮し、中川・綾瀬川流域での大雨の際に浸水面積及び浸水戸数を減らしている。

これまでの洪水調節実績は 89 回で、今年度は既に 4 回稼動しているとの事。

設備の説明を受けた後に、地下の調節水槽見学に移った。

地下約 22m の位置につくられた長さ 177m、幅 78m、高さ 18m におよぶ広大な設備で、長さ 7m、幅 2m、高さ 18m、地下のパルテノン神殿との呼び声高い重さ 500t の巨大な柱が整然と並ぶ姿は印象的であった。

地下への移動は階段しかなく、深さ約 22m(階段 116 段)は 6F 建てのビルに該当するが、景色を見ながらの移動は全く苦にならなかった。

調節水槽は、流れた水が整列した柱により圧力を調整され、後段に設置されたポンプの運転をスムーズにする役割を持っている。

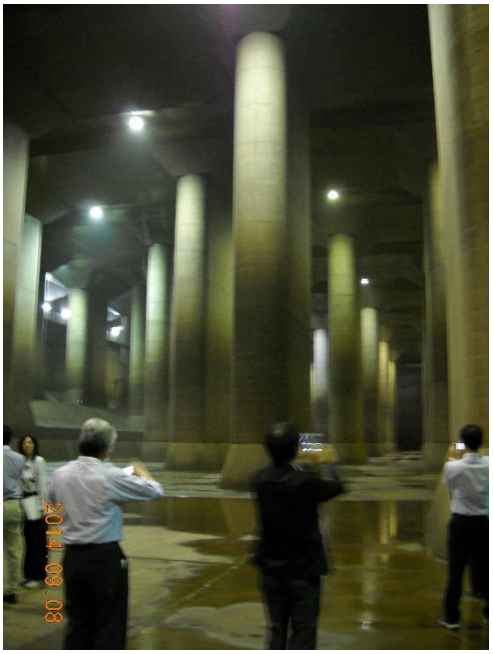
大きな効果を持つ設備だが、稼動させ水を抜いた後は土砂が 2～3cm 堆積してしまい、見学許可区域は構造から泥かきは人力で行なわなければならないとの事。全体的には渇水期に地上よりクレーンを使いブルドーザーを下ろし、堆積汚泥を除去するそうだ。

近年、集中豪雨のニュースを聞く頻度が増えた中、普段の生活では目にしない地下施設が、都市を守っている事を体感できた。

堺化学工業式会社　　大隅崇靖　記

見学が終わって、龍Q館前での参加の皆様

2014/10/01



１１６段の階段を下り、地下のパルテノン神殿と言われている幻想的な調圧水槽の内部見学。

オンライン画像より、護岸決壊の水害例。
今年は広島で土石流と言う大きな災害がありました。また御嶽山の噴火で死亡を含む多数の被害者がでました。今年の日本列島は災害列島となりました。

3.　事務局より（１０月度の予定）

月	火	水	木	金	土
9/29	9/30	1	2	3	4
×	○	○	×	第２２３回月例会	
6	7	8	9	１０	１１
×	○	224 幹事会	×	○	×
１３	１４	１５	１６	１７	１８
体育の日	○	×	×	×	×
２０	２１	２２	２３	２４	２５
×	○	×	幹部交流会	○	×
２７	２８	２９	３０	３１	11/1
×	○	×	×	○	×

１０月度の出勤予定：１２日間、赤・個人予定あり。

2014/10/01

【雑学】故郷紹介(筆者の故郷北海道余市町を語る)

鰊（漁業）と林檎(農業)のふるさとと言われる余市町は、北海道の積丹半島の基部に位置し、北は日本海に面し、他の三方は緩やかな丘陵地に囲まれ、東から順に、小樽市、赤井川村、仁木町、古平町と接している。余市町の面積は140.60㎢で海岸線は17㎞に及び、日本海を北上する対馬海流（暖流）の影響により、道内では比較的温暖な気候といえる土地である。

気温は、年平均８℃程度（一月の最低マイナス１５℃、８月の最高３１．２℃）であるが、日中高温で夜間は冷涼なため一日の寒暖の差が大きいと言う特徴があり、これが果樹の栽培（りんご、ぶどう、さくらんぼ等）に適した気候条件となっている。

余市町 HP より「森政吉氏撮影の写真」

小樽より国道5号線を余市に向かい、小樽市蘭島町を過ぎトンネルを潜り余市町栄町に入ると余市のダイヤモンドヘッドと言われる余市の象徴「シリパ岬」が目に飛び込んでくる。

余市の人口は筆者の少年時代である昭和35年の28,659人をピークに50年後の平成22年では21,258人となり7,400人ばかり減少している。主に出生率の低下によるものと、若者の進学や就職による町外への流出も要因の一つであり、地方衰退のご多聞に漏れず、本町の高齢化にも一層の拍車をかけている。北海道の人口500万人の内、札幌市に200万人と全道の40%が集中しているのが現状である。

道内に現存する唯一の運上家(下ヨイチ)

さて余市の歴史としては幕末まで蝦夷地に約６０か所あったと言われる松前藩の請負場所の内、「上・下ヨイチ」２か所を現在の秋田県にかほ市象潟町塩越出身の竹屋林長左エ門が請負っていた。その当時の今風に言えば竹屋の支店（本店は松前に置かれていた）兼・行政機関としても使われていた「下ヨイチ運上家」が現存し国の重要文化財に指定されている。家族でヨイチに住めなかったのは松前藩が積丹半島神威岬以東に女人禁制を布いたためである。江差追分に「忍路高島及びもないがせめて歌棄磯谷まで」いう歌詞があり、女子供が乗った船で神威岬を越すと難破すると伝

女人禁制の門と神威岬

かむい岩(岩礁が多く難破船もあった)

えられていた。女人禁制が解かれたのは幕末近くになってからであった。今では積丹半島一周時に神威岬はメイン観光の一つになっている。

明治に入り、蝦夷地から北海道へと名称が変わり、全道を11の国に分割、郡名を定めた。それ以前まで「ヨイチ」であった所が後志国余市郡〇〇村と呼ばれるようになった。　しかし漁業中心の蝦夷地から北海道と名前が変わり農業や産業開拓のため開拓使が置かれたが、鰊漁で栄えた余市でも未だ内陸部はわずか数キロ奥部でも開発されておらず、森林に覆われ昼なお暗き所であったようだ。明治4年、戊辰戦争に敗れた旧会津藩士の一群200名が開拓次官・黒田清隆の計らいで余市に入植してきた。刀を鍬に持ちかえた武士の農業の苦労はいかばかりであったろうか。開拓使官園の農業指導者であるルイス・ベーマーの発案で1年制の農業現術生徒（札幌農学校と演習地は同じ場所）が募集され教育が施された。明治8年ベーマー先生とその卒業した農業現術生徒が全道各地に果樹の苗木を配布、育成を指導したと言われている。余市にも林檎の苗木は配布され開拓者の庭の隅に植えられたと言われ、手入れも悪く殆どの苗木は枯れてしまったそうだ。その中で、明治12年（1880）、山田村の旧会津藩士・赤羽源八のりんご樹に大型で、美しい紅色果実（北海道名称・十九号、原名King of Tompkins County）が実った。後の名称・「緋の衣」の誕生である。また金子安蔵の樹には中型で、黄色地に淡紅・濃紅色の縞のある果実（北海道名称・四九号、原名Ralls Janet）が数個なった。後の名称・「国光」であった。関心を示さなかった開拓者の苗木は枯れたものが多いと思われるが、金子安蔵は農業現術生徒の教育を受けた一人でもあった。

「緋の衣」とは京都守護職となった会津藩主・松平容保公が孝明天皇より信頼され戴いた「緋の衣」に由来して名付けられたという。その緋の衣の原木と「りんごの発祥地」の碑が余市町の吉田観光農園（旧会津藩士の孫・初美氏宅）に現存している。

平成に入り緋の衣の謂れを通じ、余市町と会津若松市との民間交流が頻繁に計られている。

120 年ものと言われる緋の衣の原木。
今でも実を付けている。

余市では明治 12 年、弘前では明治 10 年にりんごの実が生ったと言われている。西洋りんごが初めてなった地が何方か。一般には余市といわれているが弘前かも。

鰊と林檎の故郷と言うことからか、公的研究機関として余市には北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場余市果樹園（略称北大果樹園）と北海道立総合研究機構水産研究本部中央水産試験場（略称・水産試験場）がある。両研究施設は、町の産業を技術面もさることながら、気概の上でも町民を支える原点ともなっている。

2014/10/01

福島県二本松市亀谷峠のペンネーム句碑

その水産試験場の駐車場内(明治時代の電信所跡)には幸田露伴が、余市電信所に勤務していた時期があるため、句碑が建立されている。露伴は当時20歳、電信技士として勤務していた北海道余市の電信所から職を放棄して逃亡し東京へ向かった。青森、盛岡、仙台とやっと旅をしてきたが福島に着いた所、当時は上野から郡山までしか鉄道が無く、郡山からの汽車賃を確保すべく福島から郡山まで夜を通して歩く決心をする。夜中、二本松・亀谷坂に到達したとき、睡魔が襲い道に大の字になり、露と伴に野宿をしてしまったようだ。これがペンネーム“露伴”の謂れと言われている。東京まで逃げ帰った謂れは露伴の突貫紀行という紀行文に詳しく記載されている。

「余市ってどこにあるの」と内地の方に良く聞かれる質問である。ニッカウヰスキーの北海道工場がある町と言うと一応なるほどと納得してくれるようだ。ニッカウヰスキーの創業者，竹鶴政孝が余市を工場立地に選んだ理由は多々あるのであろう。氏（竹鶴）の若き日、ウイスキー製造技術習得のため英国スコットランドに学び、当地においてリタ婦人と結婚して帰国後、一時浪人生活を送った時期もあった。寿屋（現・サントリー㈱）の社長鳥居信治郎氏に見出され、ウイスキー工場を京都府山崎に立ち上げ、サントリーウイスキーの生みの親となった。

十年勤務後、故有って退社し、スポンサーの資金を得て、若き日にウイスキー製造技術を習得したスコットランドに気候風土が良く似ている北海道、石狩川沿いの江別と比較し、結果海に近い鰊と林檎の産地である余市を選び昭和９年（1934）ニッカウヰスキーの前身、大日本果汁株式会社を

ニッカウヰスキー㈱余市原酒工場とポットスチール

設立した。ウイスキーが熟成し、製品となるまで会社を継続するため、余市の産物林檎からジュースを作り販売することにした。その社名が「果汁」であり、ウイスキーの製品には社名の大日本果汁より「日果」→「ニッカ」と命名した。現在親会社はアサヒビール㈱となっている。なお創業時に製造していた林檎ジュースやシードル（りんご酒）などの林檎を原料にした製品類は余市ではなく、現在ニッカウヰスキー弘前工場（青森県弘前市）が担当し製造している。

９月２９日(月)よりNHKの朝ドラ「マッサン」が始まった。モデルはニッカウヰスキーの竹鶴政孝とリタ夫人である。現在は竹鶴政孝の生誕地である広島県竹原市が舞台であるが、後々余市も紹介されると思う。乞うご期待と言うところである。

最後に自慢になるが、近年、世界で活躍した余市の後輩たちを数名紹介する。何れも空を飛ぶ男たちである。

- ✧ 笠谷幸生(1943生まれ)余市高校から明治大学に進学。1972年、札幌冬季オリンピック大会７０m級純ジャンプで金メダルを獲得。
- ✧ 毛利　衛(1948生まれ)余市高校から北海道大学理学部に進学。北海道大学工学部原子工学科助教授から1985年、宇宙開発事業団（NASDA）ペイロードスペシャリストに選ばれる。公式的に宇宙へ行った日本初の男。
- ✧ 斉藤浩哉(1970生まれ)余市高校卒業後雪印乳業へ就職。1998年長野冬季オリンピック大会団体ジャンプの一員として１３０mを飛び優勝に大きく貢献。
- ✧ 舟木和喜(1975生まれ)余市の中学校から小樽の北照高校へ進学。1998年長野冬季オリンピック大会団体ジャンプと合わせてラージヒルでも金メダルを獲得。

余市町 HP より「金子勝彦氏撮影の写真」

左のジャンプ台は余市高校裏手に設置された夏季・冬季利用可能のジャンプ台である。リフト、審判台設置の本格的ジャンプ台と言える。笠谷、斉藤氏が練習したころはリフトもなく、ジャンプが終わると自力で登ったものである。ジャンプ台は高校専属といってもよい場所に設置され、余市高校スキー部の練習には大きな戦力であったと思われる。

北海道の町々はどの場所も(松前藩治政の場所を除いて)歴史的には明治以降の開発した所ばかりである。余市でも旧会津藩士の家族が入植して140年位しか経っていない。アイヌ民族の暮らす地へ入植した一族の子孫であろうか。筆者の祖父も明治34年、新潟県より倶知安町比羅夫（ニセコアンヌプリの麓）へ農業移植、父は余市に写真館開業、自分は昭和38年、東京に就職し余市を離れて50年あまりが過ぎた。ふるさとは遠きにありて思うものであろうか。

《参照》

- http://www.town.yoichi.hokkaido.jp/　より
  「シリパ岬」森政吉氏の写真を持ちさせていただいた。
  「ジャンプ台」金子勝彦氏の写真を持ちさせていただいた。

（文責：小林尚道）